



医療福祉・在宅看取りの 地域創造会議 通信 第99号



第100回ワーキンググループ会議 (R4.4.28)

「コロナの自宅療養、ホテル療養の現状とケアの工夫」

●話題提供者 訪問看護ステーションオリーブ
所長/訪問看護師 角野 めぐみ さん



今年度最初のワーキンググループ会議には52名の方が参加されました。自宅療養とホテル療養、両方に関わっていらっしゃる角野さんからの話題提供は、今後、コロナと共存するために大切なことは何か、それぞれの立場で考えるきっかけになったのではないかと思います。

「命を守る」初期～第5波

- ・初期は主に入院
- ・特に、かかりつけ医をもたない若い世代で受診を断られるケースがあった
- ・偏見により、感染したことを他人に言えず、孤独が増長される
- ・入院となった高齢者の認知機能やADLの低下が顕著となった



「生活を守る」第6波

- ・コロナの体調管理以外のケアが必要な宿泊療養者や自宅療養者が増加
- ・電話診療を受けてくれる病院・医院の増加
- ・コロナに対する偏見が少なくなってきた

令和3年5月から、自宅療養者の健康観察を訪問看護ステーションへ委託

第4波…5件
第5波…83件
第6波…330件

第6波から入院のハードルが上がったことで対象者が増加

訪看に委託して良かった点

- ・看護の視点でリスク評価を適切に実施
- ・状態悪化や本人・家族からの訴えがあったケースへの訪問、一日複数回の電話による健康観察など、対象者に応じた支援の実施
- ・看護の視点で在宅ケアの方法を具体的に助言
- ・健康観察に関連した生活支援の実施 等

(草津保健所資料より)

今後の課題

これまでのように「感染したら隔離する」だけでなく
後のことを見据えて「ADLを低下させない」「QOLを考える」対応が必要

孤独にしない

寄り添う

話を聞く

参加者の声

- ・人間的な生活をどのような状況になっても続けていけるように支援していくということが大切なことであり、一住民としても、そのような視点でご近所付き合いができていけると良い。
- ・いろんな形での療養があるが、それぞれのメリット、デメリットを伝えたくて選択できると良い。
- ・“普通の暮らしの中にあるコロナ”を目指し、この経験を今後は社会の糧にしていくことが大切で、今日の話提供は、コロナとこれからも共存していく中でターニングポイントになったのではないかと思います。
- ・人は集団の中にいるときこそ孤独を感じると思う。社会から疎外されたときも同様で、そんなときに寄り添うことが大切だと再認識した。
- ・「生活を守っていく」という言葉がとても響いた。その人の思いに沿って、その人の生活をどのように支えていくのか、寄り添っていくということにとっても感銘を受けた。
- ・正しく怖がる、正しい情報発信のされ方などがさらに具体的に動いていくと良い。

- ・知り合いが罹患した際にはLineなどで積極的にコミュニケーションをとり、罹患によって孤独感を感じないようにできればと思う。また、withコロナの時代においての地域のつながりについても実践者の方とともに考えていきたい。
- ・人に寄り添うことの大切さに強く共感した。
- ・地域全体で感染者を支える体制づくりがとても大切だと感じている。そのためには正確な情報や正しい知識がとても大切なので、行政機関や教育機関の役割も重要と思う。
- ・一人一人が地域でできることを探して実践していけば、もっと安心して療養できるのだろう。職場のみでなく、プライベートでも何かできることはないかな…と考えるきっかけを与えていただいた。

滋賀県立総合病院 犬塚先生より

通常の入院であっても認知機能やADLの低下はあるが、コロナの場合、特に初期の頃は罹患者となるべく接しないような対応をしていたこともあって、高齢者では顕著であった。それに比べて自宅療養は普段の生活に近い状況で、かなり抑えられているのではないかと感じた。

【次回ワーキンググループ会議】

- 日時：令和4年5月26日(木) 18:30～20:00
- 場所：滋賀県庁 新館7階大会議室 (Web可)
- テーマ：「コロナ禍における在宅医療と地域からの支え」
- 話題提供者：米原市地域包括医療福祉センター「ふくしあ」センター長/医師 中村 泰之さん

医療福祉・在宅看取りの地域創造会議運営事務局
(滋賀県庁 医療福祉推進課内)

Tel 077-528-3529

Fax 077-528-4851

e-mail info@chiikisouzoukaigi-shiga.jp

